

ひまわりからの メッセージ

16号

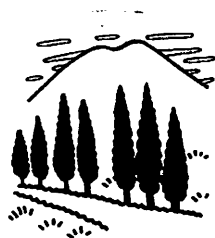
2012. 7. 10.

西濃園域
発達障害支援
センター・ひまわり

発行人：中野たみ子

心に残る

風景



俳優の火野正平さんが、視聴者からの手紙をもとに
その人の心に残る風景を探して、自転車で旅する「
こころ旅」という番組があります。ご覧になった方も
いらっしゃるのではないでしょうか。

人は、それぞれの心の中に大切な思い出と共に、美し
い風景を秘めているのでしょう。幼い日に見た海や友だ
ちと訪れた場所など記憶をつかさどる海馬という脳
の部分にきちんとしまわれているのです。

私は大学を卒業すると同時に所沢市にある旧父重の
入所施設に勤めました。日本で唯一の国立の施設で、ア
メリカの施設をモデルに作られたので、広い敷地には武

蔵野の面影を残す雑木林が広がっていました。子ども
たちは全国から集まってきており、お盆や正月に帰省
できない子がたくさんいました。広い園内には自然がい
っぱいで、子どもたちの手をつないで散歩によく行ったも
のです。夕方になると、雑木林のむこうに、まっかな夕日
が染みます。秋は疎林を通して見る夕日は美しいけれ
ども寂しいものでした。親元をはなれて暮らす子ども
たちの口に出せぬ思いがその光景と共にいつも私の心
に甦ってくるのです。

先日、ひまわり学園の卒園生と出会いました。彼は、
「先生、キャンプが楽しかった。川で遊んだ。魚もつかま
えたいね」と言うのです。「覚えてるの?」「ウン。また行き
ていた。ひまわりキャンプが心に残っていることを知って
私まで幸せな気持ちになりました。子どもたちの心の中
に残ることは、ビデオやテレビではありません。体験の中
で肌で感じ、見たことなのです。子どもたち一人ひとりの
心の中に大切な風景を残してあげたい……。そう思った
ことでした。

読みの障がい(ディスレクシア)に

苦しんだ後に教師になった。



先週、^{こうやま}神山忠先生の講演を聞きたくて、本巣市まで出かけました。

神山先生は、読字障害であったことを公表し、自分と同じように困っている子どもたちに何か手助けができるのではないかと考えて教師になった方です。

小学二年生の時、一時間読書をして、その次の時間に感想文を書くという授業があったそうです。もらった読みの必死に読んだにもかかわらず、四十分で読めたのは、三行と三分の一位だったそうです。文字を文字としてとらえられず、白と黒のどちらに注目したういいのかかわらず、必死に指で押さえて文字を読んでも、先生からは「まだ、こんな所?」と言われ、まるで怠けているかのようになんて言われて傷ついたといっています。

最近では、学習障害とか読字障害(ディスレクシア)ということばも少しずつ広がってきていますが、おそらく神山先生の少年時代には、一部の人のしか知られていないことばだったことでしょう。

かの有名なトム・クルーズが読字障がいのために、セリフは全て読んでもらって覚えるというのは広く知られていますが、日本語以上に英語は難しいことが予想されます。

神山先生は、読めないために、友だちに邪魔にされないようにとがんばったが、評価はされず、分らないから立ち上がって周りの友だちを見渡したり、立ち歩いて又、叱られるという学校生活だったと話されました。そして、ついに教師に手を挙げ、友だちにも暴力をふるったことで、ますます追いつめられてしまっています。自尊心をもてなくなり、自分は生きていても仕方のない人間だと思ふようになったのです。

神山先生のお話を聞きながら、何人かの子どもたちの顔が浮かびました。あの子たちは困っているけれど、そ

の困り感などの程度、担任の先生はご存知だろうか？

神山先生の小中学校時代のように、努力が足りない生徒だと評価されていないだろうか……と少し心配になってきました。

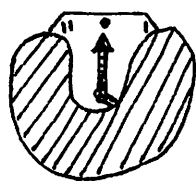
では、読字障がいといわれる症状について考えてみましょう。

- ① 文字を一つ一つ拾って読むという逐次読みがある。
- ② 単語あるいは文節の途中で区切ってしまう。(チャンキングの障害)
- ③ 読んでいるところを確認するように指で押さえないがう読む。
- ④ 文字間や行間をせまくすると、さらに読みにくくなる。
- ⑤ 音読よりも黙読が苦手。
- ⑥ 一度音読して内容理解ができると、二回目の読みは比較的スムーズになる。
- ⑦ 文末などは適当に自分で変えて読んでしまう。
- ⑧ ページの読み始めに比べると、終わりの読みは格段に誤りが増える。(易疲労性)

お子さんに思いあたることはないでしょうか？、ディスレフシアのお子さんは、読めるか、読めないかの二つのどちらかと言えば、読めるのです。でも音読が遅く、よく読みまちがいがあり、知的な遅れもないのに学習不振におちいってしまうのです。

神山先生のお話に戻りましょう。

先生は、明朝体の文字より、丸ゴシックの方が見やすいそうです。時計は、文字盤と針の位置関係がわからないので時刻が読めず、時計に図のようなカバーを置いて読むようにしたり、本にはスリットを当てて読みやすく工夫したといえます。黒板の板書は、

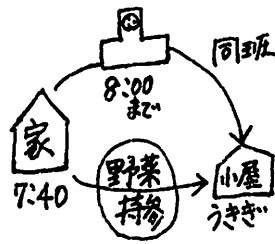


自分で書き写したものでもわからなかったし、読めないからといって、平仮名ばかりだと、よけいに困りました。分かん書きにすると読みやすく、ノを入れて読むと読みやすくなります。でも、助詞まで入れて一緒に区切れるようになったのは、中学生になって、I(私は) my me を学んでからだったそうです。

「きょうは てんきが いいので……」

小学校三年生の時には、助詞の「と」と「の」のイメージがなく、「たいこのばち」と「たいことばち」をまちがえてしまった経験も話されました。

フローチャートだと分かりやすいため、常に図を頭に浮かべたそう。図におきかえると早く正確に覚えることができるのとことです。例えば「明日は家を七時十分に出て八時までに学校に行く。家から野菜をもって行って同じ班の子とうなぎに餌をやる」というのを次のように図にすることで、正確に覚えられるということです。



うに図にすることで、正確に覚えられるということです。

神山先生の体験談をうかがいながら、どんなに辛い思いをされたのだろうか……と胸が痛みまし

た。読めないということが辛だけでなく、誰にも認めてもらえない辛さ、そして暴力に走る自分自身への嫌悪など、今もそうして苦しんでいる子がいるのだろうと思っ
て、いてもたってもいられない気持ちになりました。

先生は、高校卒業後、自衛隊に入り、それまでの文字教育とはちがって実践的な教育を受け、自分に自信を取り戻してきます。上官が手取り足取り、真剣に向き合ってくれたことで自尊心感情を取り戻し、夜間の短大で学び始めたということでした。

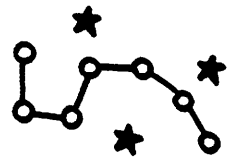
「自分が教員になって、勉強のできない子の気持ちかわかる教師になろう、自分と同じようなつらい思いをさせないために絶対に教師になるんだ」と、教師を志し、やっと新任教師として赴任した中学校で、初日にまたもや心ないことはを浴びせられたといいます。「今度赴任してきた人の中に人殺しの訓練を受けてきた人がいます。みんなで何とかしましょう。」

先生は今、子どもたちの代弁者として、色々な所で自分の体験を話し、一人でも多くの人達にティスレクシア（読字障がい）を理解してもらおうとしておられます。先生のお話は、実際の体験だからこその心にひびきました。



子どもの困り感の

要因をさぐる



今、保育園や幼稚園の先生方がCLM（チェックリストイン三重）というツールを使って、子どもたちの集団での困り感を知り、保育の中で工夫をしていこうという、試みが行われています。

昔は「理解しているから心配ない」と考えていましたが、実際には、子どもたちは色々なことで困っていることがわかってきました。

昨日は大垣市で、三重県から中村みゆき先生をお呼びして研修会が開かれました。内容はもちろん保育士向けの話でしたが、家庭でも工夫できることがあるのではないかと思います。

「先生の話を聞けない」場合、要因として、話を聞ける状況が作られていないかもしれません。子どもに注目させることができていないでしょうか？ 保育士さんであれば、歌やリズムや音などを工夫することで、皆の注意を自

分に向けることができるでしょう。家庭で何か仕事をしながら言っても子どもに伝わるはありますか。

「片づけができない」要因は、もしかしたら、どこに片付けたらいいのかが分からないのかもしれませんが。保育園では、教材があちこちにあって雑然とした室で、まずは環境の整えが必要な場合もあるでしょう。子どもたちが見てわかるように、各々の箱に絵が貼ってあれば、あの箱にはブロック、あの箱は積み木……というように分けて入れることが可能です。これは家庭でも同じですね。

「片づけなさい！」と叱る前にまず大人の工夫の心が先ですね。

このように考えてみると、実は、子どもたちの困り感の多くは、その要因をさぐって、大人が工夫することで解決していけることも多いのではないかと思います。「長い話だとわからない」のであれば、わかるようにしてあげればいいのです。だからだと言わずに「今から二つ言います」と注目させてから伝えればいいでしょう。二つがむつかしければ一つにすればいいし、一つでもむつかしければ子どもの手を取って一緒にやって教えていけばいいのです。

お母さんたちは、「加配の保育士(支援員)」をつけてほしい」と要望されますが、かえって自立を妨げてしまうこともあります。この子のどの場面での様に支援するのかが大切なのであって、全てをやってしまうと、自分かその子の唯一の相手になってしまうようでは困ります。もちろん家庭でも、同じことが言えるのです。

ひまわり学園のような施設でも一対一で職員がついていては、子ども同士のかかわりは十分に育ちません。療育の場では出来ても、保育園の生活の中で汎化されていかなければ子どもが将来生きていく力に結びついてはいかないでしょう。子どもたちの育ちを考えたが、常に今、子どもにとってどんな指導・支援が必要なのか、私たち自身が問い直していかないと、せっかく伸びようとしている芽をつみとってしまうことになります。

「発達障がいの子には視覚支援機をしてあげましょう」とよく言われます。もちろん、「ことば」という消えてしまったものよりも、確認できるカードなどがとても有効なのですが、何でもかんでも全てカードで……ということでは

ないと思います。本当に必要な時もありますが、子どもたちの心の成長と共に不要になってくることもあると思います。一人ひとりが違うからこそ個別支援なのですから……。

保育園や学校での子どもの困り感は、たしかに集団での困り感であって、家庭の困り感ではないとは思いますが、けれどももう一度、「何故だろう?」「どうしてそういう行動をとるのだろう?」と考え直してみればどうだろうか?、案外、家庭での課題が見えてくるのではないだろうか?。

私たち大人とちがって、子どもたちの一日一日はとも変化が大きいものです。漠然と、何となく見ていては、子どもたちの中に芽生えている大切なものを見逃してしまいます。私たち自身が子どもを見る目を養っていかないとはいけませんね!!

八月七日はキッズの日です。午後一時、子どもたちと一緒に活動します。出欠の連絡は七月末までに。